
こんなマリオでもいいじゃないか！！

匿名希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなマリオでもいいじゃないか！！

【Nコード】

N9233Y

【作者名】

匿名希望

【あらすじ】

20xx年、キノコ王国のピーチ姫が自称・大魔王クッパに誘拐された！

自分の欲求を満たす+ピーチ姫を助けるためにマリオは冒険へ。

マリオと他作品の愉快的仲間達が繰り広げるファンタスティックアドベンチャーが始まる！

この小説は誰でも感想が書けます！

第1話 「冒険だろ!？」 by マリオ（前書き）

どうも匿名れす。

予定よりはやく出来たんで投降します。

しかしテストが終わったらまたテストで……世の中腐ってますね
（笑）

ではスタートです。

第1話 「冒険だろ!？」 by マリオ

20XX年 9月

自称・現役スーパー配管工ことマリオは悩んでいた。

四年前、俺は「ドンキーコング事件」でその名を一躍世界に轟かせた。

自分と弟主役の対戦ゲームの発売、テニス審判へのスカウト、ビル解体、ピンボールゲームのギャラリーetc……

様々な職、経験に彼の毎日は非常に充実していた。

だが…そんな生活に俺は、徐々に物足りなさを感じていた。

だからテニスの審判、ビル解体の仕事もあつというまに辞めてしまった。

一体、俺の欲求はどうしたら満たされるのだろうか？

そんな欲求不満を抱えたまま今日も適当に寝転がりながら新聞を読む。

ふと巨大な記事に眼がいく、何々…ピーチ姫誘拐だと…？

そうか一国の姫が攫われたのか、どうりで朝から騒がしいわけだ。

「にしてもまさか一国の姫様が誘拐されるなんてね」

全くだ、しかも一部の兵士達もその事件に参加したみたいだな。

主を裏切ってどこぞ出かも知れん相手に着くなんて、随分馬鹿というか阿保というか……。

にしても犯人と思われるカメ一族のクツパとは…？

………何だ、さっきから心の中で猛っているこの…何ともいえない、衝動的なものは…？

「………どうしたんだい兄さん、さっきからやけに体が震えてるけど？」

「え？　そ、そうか？」

やはり……この衝動的なモノは気のせいじゃないのか！？

俺に足りないもの……その答えに今俺は限りなく近づいてる気がする

る……。

「そ、そういえばその犯人グループは何処へ？」

「拠点は突き止めてるらしいよ、けど手中に姫様がいるんで今は動けないみたい」

「そりゃそうだろうな……変に行動を起こせば最悪、ピーチ姫を人質にとられる恐れがある。」

「……もう少し……もう少しで……答えが見つかりそうな、気がする……！」

「拠点までの……地図ってあるか？」

「記事の裏側に拡大かして貼って有るけど……それがどうかしたのかい？」

次の瞬間、俺は衝動的に新聞をかつさらうとすぐさま手荷物を準備していた。

そしてあっという間に家を出ていた、ここまでの時間・約20秒。

何故このような行動をとったのか。そう、それは答えが見つかったから。

俺に足りない物は――

「冒険だアあああああああああああああああ……！！！！！！」

ってな訳で冒険ついでにピーチ姫を助けに行く事にしました。

ルイージ、留守番任せたぜ！

「……………」

啞然、これが今の僕の心境だ。

突然、兄さんが震えだしたと思ったら新聞紙片手に荷物作って出て行った。

あまりに動作が速すぎてクロッ。ア。プやったんじゃないかと思っ
たよ、マジで。

……あれ、まさか…僕留守番役？

まさか出番もこれだけじゃ――

第1話 「冒険だろ!？」 by マリオ（後書き）

ちなみにこの作品のジャンルはファンタスティックアドベンチャーです。

お間違いなく。

第2話 旅×敵×味方？（前書き）

第2話です、サブタイは某ハンター漫画風にしてみました。

？マークはキノコがかわりです。

ゆっくり小説執筆…と思ったら12月1日にまたテストが……………。

「第2話 ？1PLAYER GAME

2PLAYER GAME

」

マリオ「第2話、レッツエゴォー！！」

第2話 旅×敵×味方？

青い空、真っ白な雲、緑の山々、生茂る野草や筑紫――。

「ああ……これだッ！俺が求めていたのはこういうのだったんだッ――！」

マリオはまるでフィギュアスケート選手のようにグルグルと鮮やかに三回転を決める。

長い長い欲求不満から脱した彼の心はストレスなんて見えないくらい透き通っていた。

「さあて、まずは景色を堪能――ん？」

踊っていたマリオの視線にマリオのほうに真っ直ぐ歩いてくる者が入る。

マリオシリーズの名雑魚キャラ・クリボーだ。

彼等は元々はキノコ王国側の兵士だったのだがクッパの起こした事件に伴ってクッパ側に寝返ったのだ。

「オイ、お前は何者だ!？」

マリオに気づいたクリボーは荒々しくマリオに迫る。

迫ってくるクリボーに対し、マリオは全く動じずハア…とため息をつく。

「俺の名前を知らないとはな……まあいい、俺はマリオ……お前を殺す人間だあああああ!!」

「ダニイツ!？」

雄叫びとともに猪突猛進の勢いで向かって来るマリオに思わずクリボーがたじろく。

マリオはトゥッ!という掛け声と共に宙へ舞うと――

グチャ!

「ひでぶッ!」

……… 全体重をかけクリボーの脳漿をブチ撒いた。

「ハッ、どうだ!　これが俺の実りよ――」

攻撃から三十秒経過、ふと自分の足元に転がっているクリボーの死体を見たマリオは――

「うええ……おげえ……えふ……」

胃の中の物を吐きつくしたマリオは口元を手で拭くと覚束ない足取りで立ち上がる。

死体には二度と眼をやらないと誓ったマリオは再び歩き出した。

しばらく歩くと宙に浮くブロックを見つけた。

レンガで出来たブロック、？マークがかかれた黄色いブロック。どちらも重力に逆らい、ぷかぷかと浮いている。

見たこともないブロックを眼にしたマリオのテンションは一気に上昇する。

「おりゃおりゃおりゃおりゃおりゃ〜!」

次々と素手でブロックを叩き割っていくと黄色いブロックからキノコが出てきた。

これこそ皆さん御存知、マリオの必須アイテム・スーパーキノコである。

これを食べる事によってマリオはスーパーマリオになれるのだ。

だが当然、そんな事をマリオが知っているわけがない。

「美味そうだな……どれ……」

ヒヨイと口の中に入れると歯でキノコを噛み千切り磨り潰しスーパ
ーキノコを味わう。

四、五回嚙んで飲み込み一口目を喰らおうとした時、

[illegible]

突然のスーパーキノコの咆哮にマリオは思わずキノコを放し耳を塞ぐ。

「あ、あの……どちら様……で、しょうか………？」

ビビりながらもおずおずとマリオが話し掛ける。

「スーパーキノコじゃ、ボケエ！！　ところでデメエ！　何で俺を食いやがった！！？」

「あ、いやあ……そのお……おいしそうだったんで………つい」

完全に説教ムードに包まれた周囲、キノコが人間に説教さえてるこの構図、実にシニールである。

「いいか！？　俺等はな、いざというときアンタを助けるようにピーチ姫から言われててな（ry」

説教が長くなるので省略します

數時間後

「わかればいいんだ、わかれば。さあて、お前にそろそろ力を分けてやるぜ」

「マジですか!？」

まあなと鼻で笑いながらキノコが言う。

「よいいくぜ……おるうらあ
ああああああああああああ
あああああああ……！」

「うわあ ああああああああああああああああああああああ
あ！！！！！」

「……うっ……って、あっ！」

まばゆい光に包まれたマリオ、気がつくまで背が伸びてることに気づく。

まさかこれだけかよ……と普通なら思うが低身長がコンプレックスだったマリオには歓喜以外の何者でもなかった。

「ひゃっほう!!!」

アイテムの力を借り力を得たマリオ、そんなマリオの旅はまだまだ
続く！！

t o b e c o n t i n u e d
。

第2話 旅×敵×味方？（後書き）

後半ややいい加減になっちゃいました、すみません。

ではまた次回〜。

「NGシーン」

「俺の名前を知らないとはな……まあいい、俺はマリオ……お前を殺す人間だああああああ！！」

「ダニイツ！？」

ゴシャッ！！

テリユ、デデッデデデデデデンッ

『GAME OVER』

第3話 四年という月日はゴリラが変わるには十分な時間です（前書き）

ゴリラです、今回はとにかくゴリラです。

皆さん御存知、ドンうわなをするやめ（ry

マリオ「第3話、ひぁういーッ！ー！」

第3話 四年という月日は「リラ」が変わるには十分な時間です

「いやっほうー!」

甲羅を蹴り飛ばし、3のクリボーを一気に吹き飛ばす。

「いやっほううううううううううううううううう!」

「ぎゃあああああああああ!」

更に無敵アイテム・スター+燃える花(?)・ファイヤーフラワーを取ったマリオはまさに無双だった。

虹色に光る体のままクリボーの列を吹き飛ばす、ノコノコをファイヤーボールで燃やす。

敵にとっては正に地獄絵図といっても過言ではなかった。

「だあはっはっはっ! 俺、最強!」

完全に天狗となったマリオはファイヤーボールを連射しクリボーを

燃やしていく。

しばらく浮かれていたマリオだったが、ゴールバーが見えた途端懷から地図を取り出し眼を通す。

「…っと、あの城がゴールか」

案外楽勝だったな、と若干の物足りなさを感じるマリオ。

階段を上り華麗に舞うとゴールバーの先端にちよびつと指を当てて城の上に着地する。

ゴールバーの旗が降りるのを確認するとマリオは城の中へと入っていった……。

俺の視界には今、とんでもない奴が写っている。

そいつは4年前となんら変わっておらず、俺同様に眼を見開き驚愕している。

互いに忘れはしないその顔……………まさかの四年前の”宿敵”との再開とは……………。

「…なんでお前がこんなところにいるんだ……………ドンキー!!」

「…でよう、最近jirの奴が”算数なんて出来るわけない!”って言い出してな」

「へえ……ゴリラにも勉強嫌いがいるもんなんだな」

互いに胡坐をかきながら何気ない話をする二人。

一体何故この二人、こんな風になってんのか!?

遡ること、3分前――

「ドンキー、お前なんでこんなところに」

「おおマリオじゃないかウホ、久しぶりウホ」

ドンキーの応答にマリオは思わずはあ?と頭にクエスチョンマークを浮かべる。

それもそのはず、4年前彼等は敵同士でありその因縁は今でも続いてるとマリオは思っていた。

だがドンキーは違った、話を聞くうちにマリオは彼のその後について知った。

ドンキーは自らの罪を認め、見事更生したのだ。

まあ最もあの事件の裏にはただドンキーが婚期終盤だったので一国も早く誰かと結婚したかったという逸話があるのだが。

「ほう、ピーチ姫を助けるために旅をしてるウホか？」

「いやピーチ姫救出はおまけ、俺はただ冒険を楽しみたいだけなんだ」

「ええ！？ 優先順位がおかしくないか、ソレ！？」

マリオの発言にドンキーの突っ込みがある。

突っ込み時のみ語尾にウホをつけなくなるのは仕様です。

「で、お前は何でこんなトコに？」

「ああ、実は俺も同じでピーチ姫を救出するために旅をしてるウホ」

どうやらドンキーの目当ては救出後の謝礼らしい。

そういえば救出した物には褒美を差し出そうって書いて有ったな、とマリオは思い出す。

「まあこれも何かの縁ウホ、俺もお前の旅に同行していいウホか？」

「ああ、構わねえよ。どうせ最終的には俺もクッパ城へ行くしな」

「そうか、じゃあしばらくよろしくウホ」

「ああ」

二人は軽く握手をすると城の扉を開け次なるステージへと向かったのだった……。

おまけ

「次のステージは多分、ア・。オア・。ーみたいなところだと予想」

「ねえーよ!!! 絶対、ありえねえだろソレ!？」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....
.

第3話 四年という月日はゴリラが変わるには十分な時間です（後書き）

マリオの旅にドンキーが同行。

…ってかゴリラに婚期もくそもあったのだろうか……？

ちなみに基本マリオがボケ、ドンキーが突っ込みです。

ではまた次回〜。

第4話 土管を抜けるとそこにはネバーランドがあったんだ（嘘）（前書き）

ここ最近、忙しいせいで一話一話が短い……。

まあそれは二日置き投稿のせいってのも一理あるんですけどね（苦笑）

マリオ「第4話、ひあういごおおおおおおお！！！」

プロットと大幅に違うので戦闘シーンを追加しました

第4話 土管を抜けるとそこにはネバーランドがあっただ（嘘）

次のステージへ向かおうとしたマリオ達の先に有るもの……。

それは配管工なら誰でも知っている。そう、”土管”だ。

「土管だな」

「そのまんまウホ」

土管は地下へ繋がってるらしく若干警戒しながらも二人は土管の中へ入っていった。

土管の入り口から落ちていくマリオは華麗に宙で一回転し着地する。

対してドンキーは空中でボールのように回転するとそのまま地面に突っ込む。

「あっははははは！ー！ ダッセー！ 滅茶苦茶ダッセえー！ー！」

思わず口に手をあてて大爆笑するマリオ、そんなマリオにドンキーのラリアットが吹き飛ばしたのはいうまでもないだろう。

頭部から少量の血が流れているドンキーと思いつきり吹っ飛ばされ首の調子がおかしくなったマリオ。

明かりもない地下をマリオとドンキーは進んでいく。

おぼつかない足元であるく二人に突如三匹クリボーが襲撃する。

「グハッ!! 奇襲か!？」

「こいつ等…どうして俺等の居場所がわかったんだウホ!？」

それは簡単、この暗闇に何日もいた彼等にとって暗闇の空間で敵を見つけるなど何の造作もないことだ。

ふらつくマリオ達にクリボー三匹がジェットストリームアタックの要領で突っ込んでくる。

「クソ、これでも喰らえッ!!」

「「「ぎゃああああああああああああ」」」

マリオの手から放たれたファイヤーボールが直撃し三匹は火柱にな

った。

大分目も暗闇に慣れてきたのでいつもの調子で進んでいく。

そんな時、

「なあ……コレどうやって通るウホ？」

ドンキーの指差す先には宙に浮くブロック、その上にもブロックが連なり下には小さい隙間が空いている。

「どう通るって……簡単だろ、こつだよ」

マリオは寝転がるとブリッジの要領で腰を上げ両手両足を動かし虫のような動きで隙間をくぐる。

「な」

「いや、おかしいだろオオオオオオオオ！！！」

サムズアップ+ドヤ顔のマリオにドンキーの突っ込みが炸裂する。

「おかしいって何が？」

「いや、普通は走ってそのまましゃがみこんでぐり抜けるもんだろ！..」

「んなゲーム的なこと現実でやってられっか」

マリオの言葉に渋るドンキーは先ほど例に出した方法で隙間をくぐりぬけた。

その後も軽快につき進む二人、だったが……

「おい、土管があるウホ」

「ホントだな、よし入ってみようぜ」

三つ並んだ土管の右端の一本目に入ろうとしたマリオとドンキー。だが

「キシヤアアアアアア！！..」

「ギイヤアアアアアアアア！！..！！..？..？..？」

三本の土管全部から出てきたパクションフラワーに完全にビビリ目散に逃走した。

そのせいかゴール前の土管でも

「な、なあ、この土管は……大丈夫ウホよな……？」

「お、お前入って確かめてこい」

「ふざけんな！！ もしいたら俺食われるだろ！？」

こんなやりとりが十分くらい続いて、ゴールできたのはこの更に二十分後のことだった……。

t o b e c o n t i n u e d

第4話 土管を抜けるとそこにはネバーランドがあっただ（嘘）（後書き）

散々ビビッたマリオとドンキーですが次までにはちゃんと克服すると思います。

ちなみにネタばれですがマリオ一行にはまだまだメンバーが加わります。

ではまた次回〜。

お知らせ

更新のペースが二日に一度じゃやっぱ作者が死ぬので一週間に一度にしたいと思います。

あと第五話の原稿が投稿しようとした途端ネットにつながらなくなり真っ白に………… or z

気力的な問題もありますがすぐに作り直すのでしばしお待ちを。

それでは予告だけ

第5話 仮面騎士、ここに剣斬ッ!! (予告)

1 - 3、空中ステージ。

前ステージが地下だったのに対しここは上空、落ちれば陸までまっさかさまである。

更に足場と足場の間も広く、上空ゆえの恐怖感も襲い掛かる。

高所恐怖症にとっては地獄みたいなステージである。

マリオ「いやっふう!!」「」

ドンキー「ぶるあああああああ！！！」

マリオとドンキー、かつてのライバルが手を組めばまさに無敵だった。

例えるなら悟空とピッコロみたいなもんである。

「？？？」——— 多人数が少人数をいたぶるとは…あまり関心せん
な」

お知らせ（後書き）

完成までしばしお待ちを……。

第5話 仮面騎士、ここに剣斬ッ！！（前書き）

プロットでは本編だけなら全39話予定です。

何かキリがいいな………ちなみに更新ペースは不定期になりそうです。

ですが12月は比較的作者は暇を持て余しているので

その内に大量のストックを生産(?)しますので。

マリオ「第5話、ひあういごおおおおおおおー!!」

第5話 仮面騎士、ここに剣斬ッ！！

1 - 3、空中ステージ。

前ステージが地下だったのに対しここは上空、落ちれば陸までまっさかさまである。

更に足場と足場の間も広く、上空ゆえの恐怖感も襲い掛かる。

高所恐怖症にとっては地獄みたいなステージである。

だが”彼等”にはそんなもの通用しなかった…………。

「いやっふう！！」

「ぶるあああああああ！！！」

「「「ぎいやあああああああああ！！！」」」

30匹ほどいた敵があつというまに全滅。まさに集団いじめられである。

マリオとドンキー、かつてのライバルが手を組めばまさに無敵だった。

例えるなら悟空とピッコロみたいなもんである。

何故、彼等には高所への恐怖が通じないのか？ それは簡単、単に耐性があるだけである。

元々ドンキーはゴリラなので木登りで高い所は既に慣れており、マリオもドンキーcong事件とビル解体の仕事ですっかり耐性がついていた。

人間、何事も経験しておくべきである。

「よし、行こうぜ」

「ウホ」

『……………』

次へと進む彼等を見る視線が二つ。

一つは敵意の目、もう一つはそれを観察するかのような目。

当然、マリオたちはそれに気づかず先へ先へ進んで行く……。

「……………」

ここについてから俺はようやく違和感に気づく、最もドンキーはまだ気づいていないが。

俺が感じていた違和感…そう、ここまで来るのに最初に襲ってきた奴等を除いてどこにも敵がいないのだ。

もしや待ち伏せか……………、と思った時だ――。

「止まれ!!」

突然、目の前に赤い甲羅を背負ったノコノコが現れる、その後ろに何匹か――。

……………ってあれ…？ ひいふうみい……………何十、いや何百もいるぞ!？

「貴様がマリオだな？」

「ああ、それがどうした」

「そうか、ならば問答無用！！！」

突然の宣戦布告と共に赤ノコノコの背中に羽が生える、後ろにいる奴等も同様に羽が生えている。

「マリオの首は我等、パタパタ隊が頂いた。いくぞ！！！」

掛け声と共に一斉にパタパタ軍団が襲い掛かってくる……………勝機はあるか…………？

「グハッ！！」

「ウボォー！！」

「ハハハ、どうしたどうした？　それで終わりか」

空中から襲い掛かってくるパタパタ軍団にフルボッコにされるマリオとドンキー。

先ほどから何匹か落として入るが、圧倒的な数と上空からの攻撃に一方的に苦戦していた。

「死ねッ！」

隊長格かと思われるパタパタがマリオに向かい突進してくる。

それをマリオは横へ受け流すと同時に腹部に回し蹴りを喰らわせパタパタを叩き落す。

負けじとドンキーも上空から急降下してくるパタパタをパンチで吹き飛ばす。

だが二人は連戦とステージ間で休みを取らなかったのが祟り、既に体力が底を尽きかけていた。

「これでトドメだッ！！」

空中からパタパタがロケットの如くマリオの背後から突っ込んでくる。

前方にばかり気をとられていたマリオ、反応できず直撃しようとした時――

「——— 多人数が少人数をいたぶるとは…あまり関心せんな」

その声と共に突っ込んでくるパタパタが真っ二つになる。

斬ったと思われる黒い球体らしき体をしている”ソイツ”はマントを羽織り右手に黄金の剣を握っている。

「だ、誰だ、テメエ!？」

「名など無用」

その言葉と共に黒い”ソイツ”は一瞬で姿を消す。

そしてその数秒後、パタパタ達は自分の目の前が真っ暗になっていることに気づく。

慌てて誰もが動こうとした途端———

パタパタの大群は一瞬にして全員地べたに倒れてしまったのだ。

「大丈夫か？」

『……あ、あつ、はい』

ボールみたいな一頭身騎s>ジャキン!!…強くてカッコいい騎士がマリオたちの方を向く。

マリオ達は目の前で起こった一瞬の出来事にしばし啞然としていたがすぐに正気に戻る。

「…あの」

「おま…貴方は一体誰なんだウホ？」

恐縮気味に聞くマリオとドンキー。

ブロックの上にたたずむかっこい（？）騎士はフツ、と鼻で笑う。

「私の名はメタナイト、通りすがりのただの剣士さ……縁があつたらまた会おう」

そう言い残すとメタナイトは一瞬にして二人の視界から消えた。

「メタ…ナイト…」

「……なんだかクツパよりも厄介な奴が出てきたウホ」

マリオとドンキーは先ほどの彼の剣技を思い出し冷や汗をかく。

果たしてメタナイトは敵なのか、味方なのか——？

t o b e c o n t i n u e d . . .

第5話 仮面騎士、ここに剣斬ッ！！（後書き）

まさかのメタさん参戦。

彼はこの作品では一騎倒千ならぬ一騎倒万（本気を出せばそれ以上）

という三国志の呂布もびつくりの怪物です（笑）

ちなみに彼はこの後もちよくちよく出るので応援よろしくお願いします。

ではまた次回〜。

第6話 vs クッパ（前書き）

今回はサブタイを「死体は…偽者？」^{フェイク}にしてもよかった気がする。

あとクッパ城はやっぱり火山帯付近に建ってると思うんだ。

マリオ3とかでもそうだったし……………。

マリオ「第6話、ひいあうビィツぐるおおおおおおおおお！……！」

……………なんだかマリオの活舌がどんどん悪くなってるぞ……。

第6話 VS クッパ

ステージ1-4、1面最後のステージでありクッパとの対決の場でもある。

ちなみにこのステージには敵が一匹もないのが特徴。

正に”決闘”にふさわしいステージである。

城の中に突入したマリオとドンキーを溶岩の熱気が襲う。

溶岩が流れてる時点で少なからずともこの城は地中深くか火山帯付近にあるのは確実…はずである。

っていうかそうじゃなかったらおかしい。

「ついにクッパとの対決ウホ」

「…予想よりかなり早いな……まあ、いい。とりあえずまずはクッパ倒してピーチ姫救出すつぞ」

最終決戦（？）の場に早くもついたことで若干緊張感がないマリオ達。

だが打倒クツパの意志は一応あつた。

先へ進むマリオ達を熱気とファイヤーバーが襲う。

マリオとドンキーは当然のようにこれらの罠をくぐりぬけひたすら前進する。

アクション慣れしている二人にはどうってことないのだ。

「グオオオオオオオオオオ！！！！！」

クッパの雄たけびと共に前進するマリオ達が炎球が飛んでくる。

それを素早くジャンプで回避すると、マリオはクッパの立つ闘技場に着地する。

クツパは仁王立ちし、その後ろには足場を固定しているワイヤーとソレを斬るための斧がある」。

背水の陣のつもりなのだろうか、とマリオ。

仁王立ちしていたクツパがマリオに向かい前進してくる。

「グフフフフ……待っていたぞ、マリオ」

「俺アてめえに構ってる暇は無エ、冒険がまだあるんでな。悪いがさっさと倒させてもらっぜ」

「フン、行くぞ!!!!!!」

クッパが口から火炎弾を連射する、マリオはそれをジャンプで回避するとクッパの背後に回り――

「あらよつと」

「え？ あ、ギアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!??」

……斧でワイヤーを切断し、クッパは足場とともに溶岩の中へ落ちて行った。

あっという間の勝利に唖然とするドンキーを横目にマリオは奥に進む。

「おい、ピーチ姫。助けにきてやつ――」

「Thank you, Mario. Help a princess peach and the remaining friends early!」

和訳 ありがとう、マリオ。早くピーチ姫と残りの仲間を助けてあげて！

そこにいたのはピーチ姫では無くその部下のキノピオだったのだ。

「……………っていうことは、まさか！」

ドンキーが溶岩に落ちたクツパの死体に目をやる。

が、浮かんでいたのはクツパではなくクリボーの死体だった。

……………どうやらマリオ達の旅はまだまだ続きそうである。

t o b e c o n t i n u e d

第6話 VS クツパ（後書き）

今回は特になにも書くこと無いのでまた次回〜。

追伸 ……最近、恋姫×るろ剣小説を書いて見たい、もしくは見たい…。

第7話 昇龍と波動と竜巻旋風（前書き）

勘違いバトル勃発。

マリオ「第7話、ひぁういー」
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！！！！！」

第7話 昇龍と波動と竜巻旋風

ステージ2 - 1

「いやっほう!!!!」

「ぶるああああああああああ!!!!」

「「「ぎいやああああああああああ!!!!??」」」

「ここでもマリオとドンキーはいつものように暴れまわる。」

クッパ城への第一拠点が破壊されたことでマリオ達はクッパ軍から

”凶悪な害虫”とされていた。

それゆえに警備も一層硬くなっている…筈なのだがこのザマである。

「……………」

快調に進んでいくマリオ達。

だがマリオ達は気づかなかった、自分達を見ている男の視線に……。

「今回は随分早く城についたな」

「簡単すぎウホ」

あっという間にゴールへと辿りついたマリオ達。

だが彼等がゴールバーを過ぎようとした時……

「波動拳！……！」

突如、声と共にマリオ達に向かって青い光弾が飛んでくる。

それを素早く側転で回避するマリオ、回避しきれず光弾に当たりぶつ飛ぶドンキー。

「オイオイ……何だ、今の……！？」

「貴様が”クッパ軍団”の頭目・マリオだな！」

マリオはその言葉に啞然としながら技を放った男の方を見る。

赤い鉢巻、白い胴着、鍛え上げられた肉体……雰囲気からしても相
当な武人である。

「ちょ、オイ、アンタ！ 勘違いして「問答無用！！」」

マリオは男の飛び蹴りを素早く避けると男の背中に掌底を叩きこむ。吹っ飛ぶが男は受身を取り素早く立ち上がりマリオにボディープローをおみまいする。

強烈な一撃に顔を歪めるマリオ、男の右拳を払うとバック宙で間合いを取る。

「くっ……痛う……！！」

腹部を押さえながらマリオは男を睨みつける。

実力でなら自分、ドンキーをも上回ってると確信するマリオ。

「やはり頭目ともなると中々強いな……」

「テメエ……だから俺はクッパ軍団の頭目なんかじ「波動拳！！」ッ
！話を聞けエー！！」

マリオは波動拳を回避すると無数のファイヤーボールを男に向かい放つ。

これにはさすがに男も反応できず一斉にファイヤーボールがオレンジ色の閃光と共に爆発する。

完全に今ので倒れたな、と確信するマリオ。だが煙の中にたたずむ人影にマリオは目を見開いた。

煙が晴れると共にマリオは更に驚く。

男は胴着と体に煤がついただけでそれ以外はほぼ無傷だったのだ。

「て…テメエ……あの攻撃をどうやって防ぎやがった!!?」

「簡単だ、すぐさま爆発の上に跳んで逃れたただけだ」

こうなったら……、と拳を強く握り締めるマリオ。

ソレを見たのか男もすぐさま技の構えを取る。

「最後に教えてやろう、俺の名前は”リュウ”。お前を倒した男の名だ!!」

「くっ…勘違い野郎が……俺はクッパ軍団なんぞの頭目じゃあ無エつての!!」

「…ならそれが真実か否か……その拳で証明しろ!」

「上等だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!
!……!」

駆けだしたマリオが高くジャンプする、その拳は赤き炎を纏わせて。

「くらええええええええええ!!」

そのまま猛スピードで急降下するマリオ、それと共にリュウも拳を握り高く跳び上がる。

「はあああああああ！！！」

「昇龍拳！！！」

二人の拳がぶつかり合うとともに眩い閃光が当たりを包みこんだ――。

激闘から数秒後、立ち上がったリュウは地面に突っ伏しているマリオを見る。

彼の言つてたことは本当だったのか、と後悔するリュウ。

とりあえずここにいたらいずれ起きたマリオにフルボッコにされるのが確定なので彼はそそくさにその場を去った。

t o b e c o n t i n u e d

第7話 昇龍と波動と竜巻旋風（後書き）

リュウのスペックはスト2時代です。

それではまた次回~~~~~。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9233y/>

こんなマリオでもいいじゃないか！！

2011年12月17日16時46分発行